

36 月舟寿桂（幻雲）の医界における交

友関係

○1小曾戸洋・2森田傳一郎・3水沢利忠

月舟寿桂（一四六〇—一五三三）。号は幻雲・中孚道人。きわめて高い学識を備えた室町時代の代表的禪僧である。医学史上では、日本初の印刷医書、大永八年阿佐井野版『医書大全』に刊語を記したことで知られるが、その医学に関する深遠な知識は、米沢本『史記』（国宝・歴史民族博物館所蔵）の扁鵲倉公列伝に遺された夥しい標記に顕著である。幻雲は入手可能な限りの数多くの医薬文献を駆使して標記作業を行っており（昨年の本学会で報告）当時の日本における漢籍医書の受容情況等を解析する上で絶好の史料となっている。

幻雲は当時いかなる社会的立場にあつてこれらの医書を目にし得たのか。また幻雲をしてかくまで医学に興味を抱

かしたものは何か。幻雲の医学書受容の態度に正しい評価を与えるには、この背景をある程度明らかにしておく必要がある。このような観点のもとに、今回幻雲の医界における交友活動の足跡を若干検討したので報告する。

幻雲は京都に生まれ（一四六〇）、近江磯野の楞嚴寺にいた正中祥瑞に従学。正中に就いて京都で出家（一四七七）、正中入寂（一四九二）まで随侍した。京にあつて天隠竜沢らと交わり、学才を知られた。一時丹波の願勝寺に乱を避け、のち越前の朝倉氏に招かれ、弘祥寺に住した（一五〇九）。ついで京都の建仁寺に住し（一五二〇～二五）、またその間、越前善応寺に赴き（一五一八）、さらに南禅寺の帖を受けた（一五二二）。晩年は建仁寺内に創建した一華院に隠居し、そこで没した（一五三三）。

竹田円俊（高定）・竹田定祐（月海・光照）

『幻雲文集』（以下『文集』という）に「竹田月海光照法印肖像」と「薬師寺円俊高定和尚寿像」の二文を収める。実は前者の幻雲自筆稿（享禄二年八月三日付）が研医会図書館に現存しており、さらに『文集』にない「竹田月海光照法印真讚并序」（享禄元年仲秋付・自筆）が付属している。これ

らは円俊（一四五五～一五二九）、定祐（一四六〇～一五二八）の没する直前・直後に書かれた史料だけに、竹田氏の家系や当時の状況を窺う上で貴重である（新村拓『日本医療社会史の研究』において『文集』は活用されている）。幻雲の扁倉伝標記に、両人の父照慶の著『延寿類要』が国書として唯一引用される背景にはこのような繋りがある。

坂上池院進月（宗精）

上池院進月（一四五二～一五二二）は坂九仏から数えて七代目。『文集』に「上池院進月宗精法印肖像并序」があり、これは新村氏の指摘のごとく進月に関する最も詳しく正確な史料である。『幻雲詩稿』（以下『詩稿』）にも関係を示す記事が見える。

陳外郎有年（祖田）・友蘭（周晦）

元朝滅亡に伴い日本に亡命した陳宗敬（順祖）を祖とする陳外郎家の四代。『文集』に「陳有年員外郎遺像」を収め、『詩稿』にも関連記載がある。陳外郎五代は友蘭周晦。『文集』に「陳員外郎友蘭晤公肖像」を収め、父子二代との交誼を示している。

谷野一柏

一柏は越前一乗谷で日本第二の印刷医書『勿聴子俗解八十一難経』を開版した学僧で、医学の弟子に和氣明重がいる。幻雲は一乗谷を七度も訪れている。『文集』所収の「扇面贈一柏老人」「跋命期経軌限盈縮図後」は両人の密接な交際を示す。一乗谷で『湯液本草』焼片が出土した事実と、幻雲標記に同書が引用される事実との間には、間接的にせよ何らかの繋りがあるであろう。

雪岑（安公）

『文集』に「賛雪岑老人所藏神農像」を収め、雪岑は坂上池院定国（進月の子）の門人という。ごく最近古書市場に、この幻雲自筆賛のある神農画像の実物（大永六年五月付）が出現した。幻雲は神農の賛をいくつも書いた。『文集』『詩稿』に他三種が載り、また別に幻雲自筆賛の神農画像も現存している。

さらに『文集』には息軒をはじめ、医療関係者との交誼を示す記事が散見する。

(1) 北里東医研医史研

(2) 二乃沢病院

(3) 文教大学文学部